

7 節 救いにおける聖書の明瞭性

7-① 聖書の中にあるすべての事柄は、それ自体で同じように平易でもなければ、すべての人にとって同じように明瞭であるというわけではない。

「その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な心の定まらない人たちは、聖書の他の個所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。」 ㊦

ペテロの手紙 第二 3・16

※聖霊の助けによらず、自分自身の知識によって理解しようとする者は、意味を曲解する。《脚注》

※7-①は、次項の7-②に述べられているように（救いのために、知り信じる必要のある事柄）については、聖書は明瞭であるが、信仰の初歩の人、円熟した信仰を持ち人生経験豊かな人、歴史的、語学的問題について学んだ学者たちと同じようには、明瞭でないことを言っている。従って、聖書はしっかり学ばなければならない。「信仰の初歩の人と信仰の円熟した人生経験豊かな人とは聖書は同じように理解されません。また、歴史的問題とか語学的問題とか、学者には明白なことでも、普通の人には理解できません」《講解》。「従って、聖書の満ちあふれる富を十二分に活用するには、しっかりした学問と一貫した学びとが必要となる」《註解》。「カルヴァンは、信仰とは神の恩恵のたしかな知識だと定義した」《解説》。

7-② しかし、救いのために、知り信じ守る必要のある事柄は、聖書のどこかの箇所、非常に明瞭に述べられ明らかにされているので、学識のある人ばかりでなく、そうでない人も、通常の手段を適切に用いることによって、十分な理解に達することができる。

「あなたの御言葉は、わたしの道の光

わたしの歩みを照らす灯。」 ⑧

詩編 119・105

「みことばの戸が開くと、光が差し込み、

わきまのない者に悟りを与えます。」 ⑨

詩編 119・130

※この項も宗教改革当時のカトリック教会に対するアンチ・テーゼが含まれている。

ローマ・カトリック教会が、その当時、「聖書は平信徒にはとても理解できない奥義を書いた本だから教職者や学者が教えることを信じろ」《解説》としたのに対し、宗教改革者たちは、「われわれの救いに関する必要な事柄は、決して学者の分ではなく、普通の人たちによって理解される。・・・救いについては、聖書は、いわゆる一般信徒によって把握できるほど十分に明瞭、明確である」《註解》とした。「聖書は自分の本として毎日学んでこそ、神の啓示の書なのである」《解説》。